

こびとの囁き
その2
曲がり角



小太郎君はチャンバラごっこが大好きでした。しかし、友達はテレビの映画「コンバット」の影響で、トミーガンやシユマイザーガンを使った戦争ごっこが大好きでした。

しかし、小太郎君はみんなと遊んだ後、家に帰ってきてから弟の小次郎君とチャンバラごっこをして遊び直しました。小太郎君は同じくテレビ映画「白馬の剣士」の影響でチャンバラごっこの方がずっと好きだったからです。

なぜ「コンバット」ではなくて「白馬の剣士」だったかというところには、みんながお年玉や何かでちゃんとした機関銃のおもちゃを買ってもらって持っているのに、小太郎君はお年玉をもらったことがないので、仕方なく家にあった木材の端切れや釘を使って自分で機関銃をこしらえたのですが、とても恰好が悪く、みんなに気後れしてあまり楽しくなかったからです。

もう一つの理由は、こちらの方が強かったのですが、豊臣家の残党の若武者がたった二人で、江戸幕府を開いたばかりの徳川家康の家来やその軍門に降った諸藩の家臣群を数多（あまた）相手に、幾多の難関、危機を乗り越えて、それでも「につき裏切り者」の家康の首を狙いに行くというのがとても格好良く思えたからでした。

それで、友達との遊びから返ってくると、早速小次郎君と庭でチャンバラをはじめ、テレビの画面に做って（ならって）名乗りを上げたり、刀を合わせて小競り合いしたり、切ったり切られたりして「えいっ」とか「やられたー」とか夕暮れまで遊んでいました。

時には、それが高じて、家族で高尾山に遊びに行ったときに買ってもらった木刀にひもを巻き付け、それを背中に背負い、そのせいで背負えなくなったランドセルを手持って登校して「一体おまえは何を考えているんだ。学校にそんな物騒なものをもってくるんじゃない！」と先生に大目玉を食らったこともありました。

あと、小太郎君は野原歩きや里山登り、田んぼのあぜ道歩きが大好きでした。小太郎君はそのあちこちを歩いて、友達と蛙や虫やザリガニを見たり捕まえたりして遊んでいたのです。そんなわけで、学科の中では理科だけが大好きでした。成績は良くないのですが、授業はとても楽しかったのです。

授業と言えば、小太郎君は、普通の学科があまり好きではありませんでした。とにかく机に向かつて、教科書と黒板ばかりを見ているのが苦痛だったのです。その点、野山歩きや理科の課外授業は、空の下の広いところに出られて、自由にあちこち駆け回ることが出来るので楽しかったのです。

それと、宿題も好きでした。宿題と言っても、学科の宿題ではなくて、産休で代わりにやってきた臨時教員のおばちゃん先生が始めた「自由帳」の宿題が好きだったのです。

これは、その日のうちに気づいたこと、感じたこと、疑問に思っただけのことなど、何でも好いから書いて持って行くと言う宿題でした。それを先生が見て、一重丸から花丸を赤ペンでつけ、いいものや面白いもの、みんなが知っていると思えるものは、先生が読んで聞かせるというものでした。

小太郎君はこれに夢中になりました。

野山の小動物の観察に始まって、深夜の月の満ち欠けの観察や、とても関心の高かった恐竜の研究など、手当たり次第に自由帳に書いていったのです。

「今日は5ページ書いた」「今日はもつと書いた」と熱中し、学校の勉強などそっこのけでしたので、成績はむしろ悪くなっていきもしたのです。

しかし、当人はそんなことにはいっっこうにお構いなしで、学科の授業を除いては、毎日が楽しくて仕方ありませんでした。

ところがある日、小太郎君はお父さんに呼ばれました。小学校が冬休みに入った最初の日曜日の夜でした。

お父さんはクリスマスの日小太郎君がもってきた成績表を前にして言いました。

「おまえも、来年は六年生になる。だのに、遊んでばかりいてちっとも勉強に身が入っていない。このままでは良い上の学校に行けない。とにかく今の小学校は田舎でのんきすぎる。刺激がない。だから、冬休みが明けたら、転校しなさい。隣の学区にある、みんな勉強する小学校にだ。越境入学の手続きは済んでいるから。分かったな」

小太郎君は一瞬、ポツカンとしてしまいました。そうしてしばらく経ってから、高いクレインからつり下げられた家壊し用の大きな鉄球が引くだけ引いたあとで放され、思いつきりたまった加速度を伴ってドッカーンと頭に打ち付けられたような衝撃を感じました。

頭の中が混乱しました。

「なに？なに？なに、それ？」

自由帳がなくなる。友達もいなくなる。野山歩きも出来ない。第一友達にお別れの挨拶もしていないで、突然消える？

そうしてしばらく考えてから、ここに住んでいるのに、他の学校に通う？それってどういうこと？みんなに会ったら、なんて説明するの？変なヤツだと思われるよな。隠し事するうそつきなヤツだって。みんなを捨てたヤツだって。粗末にしたヤツだって。これってはっきり言って裏切り者って言うこと？

しかし、頭が良くて身体の大きなお父さんには何も言えませんでした。

出口を見失った小太郎君は、一瞬にして真つ暗闇に放り込まれたような気がしました。楽しみにしていた、大晦日やお正月の行事もいっぺんに吹っ飛んでしまいました。

お父さんはすでにお風呂に入りに行っていないなくなっていました。

「ぼくはっていうことは、小次郎も、っていうことか」

ということは、ふたりでチャンバラも出来なくなるのかとも思いました。

小太郎君は、大きな曲がり角にさしかかったような気がして、曲がり角の向こうに何が待っているのか、想像が付かず、ただただ大きな不安を覚えたのでした。